
日照権

みつる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日照権

【Nコード】

N0687V

【作者名】

みつる

【あらすじ】

少しふざけた設定の中学生たちの、割と真剣な物語です

*この話はフィクションであり、この世の全てのものに何の関係もありません。

0 . プロローグ (水神龍) (前書き)

初めまして、こんにちは、みつるです

この駄文は、作者の妄想が具現化したモノの為、説明不足・無理な設定などが多々見受けられると思います。ご注意ください

また、色んな形の友情、繋がり、恋愛なども、書けたら書いていきたいので、そういったものを許せる、心の広い人のみどうぞ

0 プロローグ（水神龍）

「そんなに泣くなよ、龍^{りゅう}。お前は男だろ？強くなりてえんだろ？大丈夫だ。人はみんな、日に当たる権利を持っている。お前もいつか俺みてえに、大きな光に会えるから。」

昔、大泣きしている俺を兄貴はそういつて慰めてくれたことがあった。

正直、泣くので忙しかったのと話が難しかったのでほとんど意味が分からなかったけど、その時の兄貴の話し方があまりにも温かかったから、意味を理解せずとも俺はその話を聞いて安心して眠りかけたのを覚えている。

そう、ガキだった俺はその言葉をまだ理解してなかったんだ??? ?。

0 プロローグ（魔怖黒斗）（前書き）

この駄文は、作者の妄想が具現化したモノの為、説明不足・無理な設定などが多々見受けられると思います。ご注意ください

また、色んな形の友情、繋がり、恋愛なども、書けたら書いていきたいので、そういったものを許せる、心の広い人のみどうぞ

0 プロローグ（魔怖黒斗）

「黒斗^{こくとう}、ちよつと来て」と母さん。

「…何？」そう聞き返しながら母さんに近づく。本当は、聞き返さなくたって分かってる。またあの事だろう。思わずため息をつく。「いい？あなたはみんなと何一つ変わらないの。違うのは、私の大切なただ一人の息子ってことだけ。だから、自分自身に誇りを持ちなさい。」幼い頃から引越しの度に言われ続けた言葉だ。

苦手だ。あの頃を思い出させるような、いつもの明るさからはほど遠い真剣さも、静かな声も。この人は、わざわざ「みんなと何一つ変わらない」と言い聞かせる事が逆に、「俺がみんなとは違う事」を強調している事に気がついていないのだろう。

だから俺は、黙って小さく頷く。わざわざ否定するほどの事でもないから。

”俺がみんなと違う事”

1つは、俺は完全なギフテッドだということ。事実、生後一ヶ月でその能力を発揮して、知的分野と芸術分野は勿論のこと、精神運動性、知覚性、（ギフテッドには無関係だが）運動分野等で誰よりも秀でていた俺は、その能力を生かして、今現在存在する全ての資格を得ている。

2つ目は、俺の立場。自分の持つ能力を生かして、貧乏だったこの魔怖家^{まふ}を、今や世界的な大企業にまで急成長させた俺は、当然魔怖グループの若社長という責任を問われる立場にいる。

3つ目は俺の過去。魔怖グループの為に、自分たちの為に、俺が誰にも言わずにいた俺の過去。

これが、俺と他者との違いだ。この儀式をする度に知らしめられ

るこの異質の証。

ため息をつき、

「古中学校か……」と転入先の中学校の名前を確認する。

古中学校。自由な校風を特色としている、小中高大一貫の私立校だ。その校風を全身で表しているような理事長の顔を思い出す。

そこには、新しい生活にどこか期待している自分が、いた。

1 出会い（前書き）

この駄文は、作者の妄想が具現化したモノの為、説明不足・無理な設定などが多々見受けられると思います。ご注意ください

また、色んな形の友情、繋がり、恋愛なども、書けたら書いていきたいので、そういったものを許せる、心の広い人のみどうぞ

1 出会い

この古中学校に、あの魔怖黒斗まふくくとが転入してくるらしい。

ここ1週間、古中で持ち切りの話題だ。

といっても、噂している人間の9割方はその話題を一種の冗談として話しているに違いない。なにしろ、その噂の発信源である校内一の情報魔は、人を欺き不幸のどん底に突き落とすことを生き甲斐にしている、悪趣味な奴だ。そいつを信用して痛い目にあつた奴が何十人いることが。

とにかく、そんな最高に信用できない噂で一週間も盛り上がるほど、その時俺たちは退屈してたんだ。

そして、俺たちがその噂を話題にして盛り上がってから一週間後の昼、つまり今日の昼、この古中に転校生が来るとの情報が入った。

しかも、そいつが来るのは、俺たちのクラスだとか。

尋常じゃなく、静まり返った教室。普段だったら、チャイムが鳴ろうと、先生が来ようとお構いなしに、自分の時間を確保する古生たちなだけに、とてもじゃないけど落ち着かない。

ましてや、後もう少して転入生が教室に到着するのだ。当然学校中の自称・人間観察が趣味、という他クラスの野次馬たちが、教室の窓から顔を覗かせて、暑苦しいことこの上ない。

昼に転入してくる、ということは、少なくとも普通の立場にいる転入生ではないのだろう。

しかし、それだけでは転入生が魔怖黒斗とは断言できない。何しろ、この古中には魔怖黒斗のような、超大金持ちのお坊っちゃんやお嬢様だけではなく、芸能界に通じる人間なども、そこそこ在籍している。昼に転入してくるただけでは、まだ何とも言えない。

魔怖君、確かに先生はそう言った。

あの魔怖黒斗が転入してくるといふ噂は、本当だったんだ……

ガラ、と、先ほどと同じ間抜けな音と共に、噂の転入生・魔怖黒斗は姿を現した。

真っ黒な学ランで華奢な身体を包み、無表情で教室に入ってきたそいつのは、尋常じゃなく整った顔立ちをしていた。

とたんに、ざわつく女子。全体的に顔のレベルが高い古生に、これだけ騒がれるとは、それだけそいつの美形っぷりは凄いと言つことだろう。

男の俺からしたら、面白くない状況この上ないが、とりあえずそういった方面に疎い俺の想い人・悦悟杞えつごき乃と、親友・山科愛華やましなあいは特に反応していないので、まあ由としよう。

「……魔怖黒斗です」

ぼそりと、しかし決して聞きづらくはない、低く淡々とした事務的な声。年齢に合わない、その声と表情に、俺は思わず眉をひそめた。

人と、関わるつもりがないのだろうか。それとも、人に慣れていないだけなのか。

ふと、3つ上の姉貴・沙さの顔が横切った。

そう言えば、姉貴もこんな声と表情の時があつたな。但し、その理由は前者で、しかも両親のみに対して、だが。

まあ、姉貴の話は置いて……

コイツは、どっちなのだろうか。

2・繋がり（前書き）

この駄文は、作者の妄想が具現化したモノの為、説明不足・無理な設定などが多々見受けられると思います。ご注意ください

また、色んな形の友情、繋がり、恋愛なども、書けたら書いていきたいので、そういったものを許せる、心の広い人のみどうぞ

2・繋がり

席に着くと、クラスメイトに囲まれ質問責めに合う黒斗。お陰でその前の俺と愛華の席、それと（羨ましいことに）その隣の杞乃の席は、めっちゃくちゃ狭い。というか、完璧に容量オーバーである。

始めは皆、人の子らしくまともな質問をしていたが、さすがは古中生。一通りのオーソドックスな質問を終えたあと彼らがした質問は、あまりにも無意味かつどうでも良いことばかりだった。

「ねえねえ、お金持ちってことは何？毎日豪華なもんでも食べてんの？胃とか凭れない？」これは豆腐屋の息子で薬づくりの天才からの質問。

「金持ちっていったらやつば、家用ジェット機だよー！！機種は何なの！？」これは乗り物オタクからの質問。

まあ、ここらへんはまだ序の口だ。もっとマイナーな質問としては、こんなものもある。

「あのさあのさっ、コーラとかの瓶についてるスカートって、何個って決まってるわけ！？」何故それをわざわざ転入生に聞いたし……、炭酸中毒の紅茶博士。

「あーそうそう、それで思い出したんだけど、あんた女装の趣味ってある？金持ちにはそーゆー変わった趣味の人が多いうって聞いたんだけど」超冷静に何聞いてんだこの漫画オタクがっ！！資料かつ！？メモ片手にしてるってことは、資料なのかっ！？月一回は行われるあの悪夢の資料集めなんだなっ！？

……駄目だこりゃ、つつこみが間に合わねえ。

だが、そんな変人達……じゃなくて古中生の変わった質問に、少々引きつった顔をしてはいるものの、この新参者の魔怖黒斗は律儀にそれら全ての質問に答えていた。

「いや、普段は和食を好んでいるから、問題はない」

「家用ジェット機は持っていない。レンタルで間に合ってる」

「21個だ」

「俺にはそんな趣味はない」

「すげー、特に最後から2番目すげー。普通スカートって単語でもうアウトだろ。流石は天才若社長（笑）」

「それにしても……、」

「な、なんか人間増えてね？」

「た、他クラスの人も来てるみたいっ」

徐々に増えていく人に押されて、机ごと体が動く様子に、思わず愛華と一緒に声をあげる。気分的には、年末の安売りセールに駆り出されて、人混みではぐれてしまったときの、あの衝撃に近い。

「ってか杞乃、何でそんな人混みの中普通にニコニコしてんだよ。いや寧ろ、なぜ皆杞乃にだけ気い使って黒斗に群がってたんだよ。やつば古生と言えど美形は待遇すんのか。流石は犯罪級に可愛い杞乃やつば可愛いなおい……、じゃなくてっ!!」

まあそんなわけで、この日は後ろの転入生とは大して接触するとはなかった。いや、正直俺は別にどうでもいいんだ、あんな仏頂面のボンボンなんか。

けど、杞乃は違った。基本的に博愛主義みたいな性格だから、新しいクラスメイトとも仲良くしたいのだろう。いや、ガチで純粹にそれだけであってほしい。

だから、帰り道に黒斗を見つけたときには、それを杞乃にも教えるようか、少し迷った。

「んじゃ、また明日っ、バイバイぜよっ!!」

「おうっ、また明日なっ!! 気いつけて帰れよ!!」

「バイバイ、杞乃ちゃん」

商店街の入り口で、杞乃ちゃんと別れて、私たちは手を振る。

いつも私たちは、龍くんと杞乃ちゃん、私の三人で登下校しているんだけど、杞乃ちゃんだけは途中から方向が別だから、こうして商店街の中では、私は龍くんと二人つきりでいることになる。

以前龍くんは、こうやって（大好きな）杞乃ちゃんと別れるのが少し寂しいと言っていたけど、実を言うと私は、龍くんと二人つきりになれるこの短い時間が、小学生の時の様で好きだった。

「あー、それにしてもほんとと、エラい目にあったよな……」

「ほんと、凄い人ばかりだったもんね……」

本当に疲れた、みたいな大げさな表情に思わず笑うと、龍くんは頬を膨らませて、「愛華」と少し情けない声をあげるから、私はまた笑ってしまった。

そのとき、ふわりと香ばしいソースの香りがして、私は笑うのをやめた。龍くんもそれに気づいたようで、おっ、と小さく反応すると、「あーくっそ、超いい匂い。お好み焼き食いてー」と笑った。

生まれたときから、ずっとお世話になり続けたこの商店街は、いつも賑やかで活気づいている。お客さんがいつもたくさんいる、つて訳ではないんだけど、例えば商店街の人の宣伝する声だとか、例えばお客さんとお店の人の会話だとかが、凄く暖かく感じる。

「おっ、龍ちゃんと愛華ちゃん、おかえり。今日も学校は楽しかったか？」と、八百屋のおじさん。

「おかえり、龍坊と愛華ちゃん」これは、駄菓子屋のおばあちゃん。たくさんの商店街の人が、おかえりといってくれる度に龍くんは、「ただいま、勿論楽しかったぜ」

「もう中学生なんだから、その龍坊つての、いい加減やめてくれよ、ばーちゃん」と、一つ一つに笑顔で返していく。

私も同じように「ただいま」と返すんだけど、正直未だに恥ずかしくって、どうしても小さな声になってしまう。

「あ」

そう小さく呟いて立ち止まる龍くん。

不思議に思つて私も歩くのを止めて、龍くんと同じ方向を見ると、そこには商店街の中の一つで本屋の、「秋月書店^{あきづき}」が。

今日はお客さんが来ているみたいで、珍しくこの店長代理の秋月^{とつき}兔月さんも店に顔を出している。

見覚えのある黒髪と学ランで、黒づくめのそのお客さんは、丁度私たちとは逆方向を向いていて顔が見えなかった。けど、兔月さんの嬉しそうな顔つきからすると、多分知り合いだろう。

ふと、兔月さんが私たちに気づいて「おかえり、龍くん、愛華ちゃん」と、また笑った。

「ただいまっ、あと久しぶり、兔月さ……、ん？」

「ただいま、兔月さん……、え？」

兔月さんが手の振る方向に反応して、振り返ったお客さんと目があつた瞬間、意外すぎる人物に私たちは思わず間抜けな声を上げてしまった。

そこには、丁度先ほどまで話題に上っていた人物、魔怖黒斗君が、いた。

2・繋がり（後書き）

文中に出てきた「スカート」とは、^ノ瓶についている栓の、^ノあのギザギザした部分のことです。

昔読んだ児童書から抜粋したウンチクです

2・繋がり（黒斗視点）（前書き）

この駄文は、作者の妄想が具現化したモノの為、説明不足・無理な設定などが多々見受けられると思います。ご注意ください

また、色んな形の友情、繋がり、恋愛なども、書けたら書いていきたいので、そういったものを許せる、心の広い人のみどうぞ

2・繋がり（黒斗視点）

かつて母が生まれ育ったこの地は、俺の思い出の場所でもあった。町の風景、商店街の賑わい、そして、あの子の表情。すべてが6年前の、あの日のままだった。

野次馬をかき分けて早足で帰った帰り道、夕餉時で活気づいている商店街を横断しながら、その景色を記憶と照らしあわせる。

ふと、もう日は高く昇っているというのに、ようやく雨戸を上げ始めた店を見つけて立ち止まった。商店街の中でも一際古びたその店の名は、「秋月書店」。

店から出てきたのは、紅茶色の長い髪の人だった。

本屋の店員とは思えないラフすぎる出で立ちで、眠そうに目を擦るその人は、俺のことを見つけるが否や、目を細くしてこう言った。「お久しぶり、随分と大きくなったね、黒斗君。……って、もう僕のことは覚えてないかな？」

「まさか。僕の方こそ、もう忘れられたんじゃないかと思っていましたよ。……お久しぶりです、兎月さん」

「あははは、君は昔頃から賢かったからね。引っ越してきたんだっけ？もう荷物は片づけた？」

「ええ、何とか」

「まあまあ、そんなに堅く敬語なんか使わないで。丁度お茶もお菓子もあるし、昔話でもしようか」

懐かしいその言葉に、一瞬昔の記憶が重なった。

「……ありがとう、ございます」

俺は、変われるだろうか。

「言ったそばから君は……」仕方ないなあ、というように苦笑する兎月さん。「そういう所は変わらないね」

また、昔のように笑えるだろうか。

「……そうですね」

「まあそこが、君の良いところでもあると思うんだけどね」
「……いや、きっとこの町でなら、変わる。」

「……それでさ、……あつ」

ふと、何かに気づいて話を止める兎月さん。

「？」

「おかえり、龍くん、愛華ちゃん」

嬉しそつに手を振る方向に、つられて振り返るとそこには今日出会ったばかりのクラスメイト2人。

確か……、

「水神龍、と山科愛華さん」

2・繋がり（黒斗視点）（後書き）

とりあえず一気に更新しましたが、多分続きは相当後になります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687v/>

日照権

2011年7月21日03時10分発行